

近世
物語
霜夜星

卷之二

13
1299
2



1299
2

近世怪談霜夜星二卷

東都 種彦著



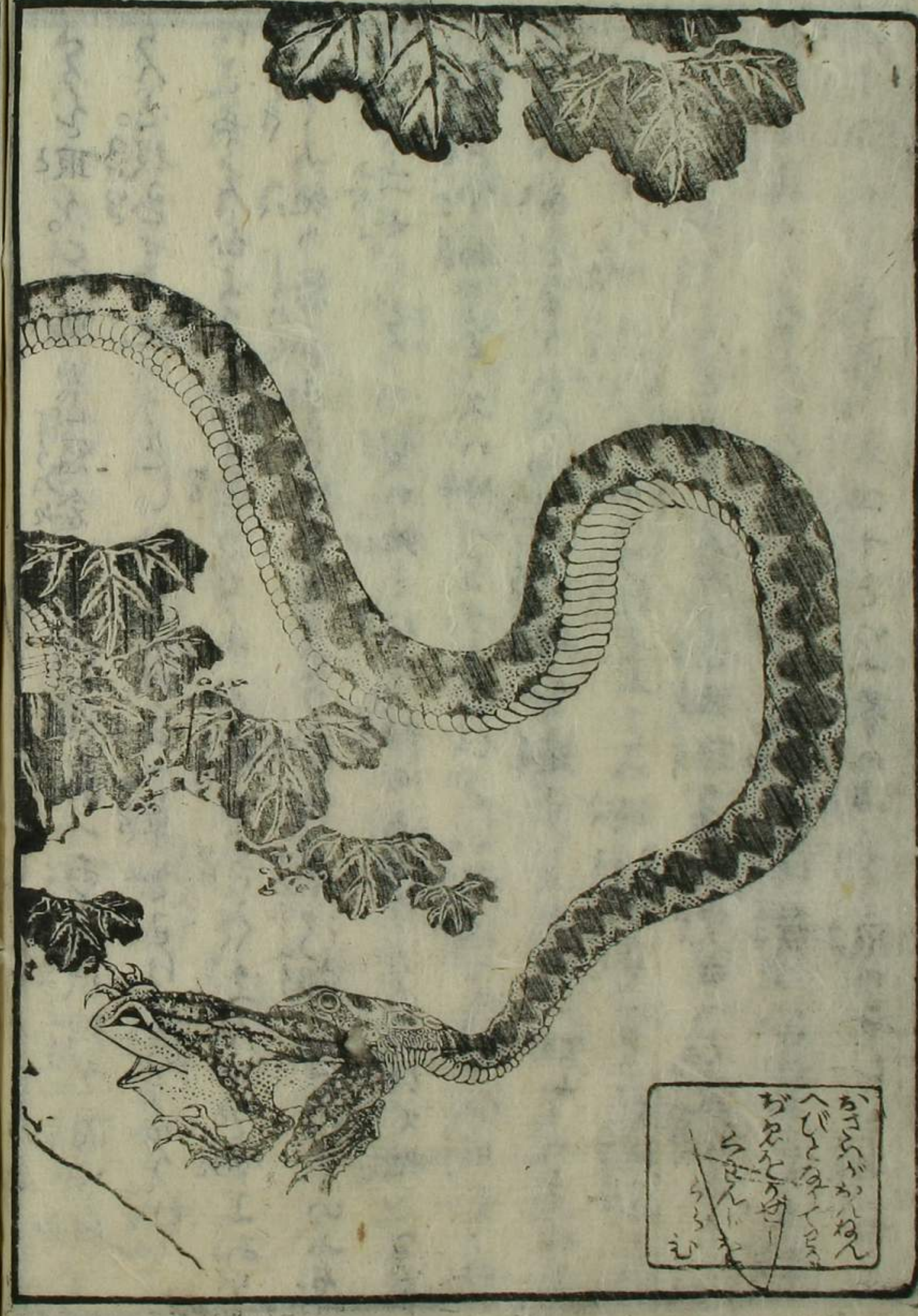
第一回

海辺のめづら
あまぎの紅絲

今といふ久く昔といふ近き頃よりなるガ一の怪変あり。その
 首尾をらげぬる小下徳と武彦のあはひは須磨といふ処あり。は
 りしつゝ小花方求次郎といへる處士代々館室をひすらくふはくり
 をまわたり元来素質賤倉庫よりその田舎はしてあめづる家
 富榮只夜を詠詩を賦し。数口の家といふいとあつらふらしむる。
 前へ郷々る滄海に朝馬浪に映し。東に徳房の二列を見をらし。
 西に高繩芝浦の弓のどく曲り。霞帆矢のどく花もや文也。

中庭前のゆきぢいろをありてひきかきし猶もはれはまはりさかき
 づじとあしはれのへどそなれ友どち六人四人うち交り求次郎が
 今合海辺に出て道逢一夕日小る人ある紅葉見も秋の日のく
 れ中とれをかたら既又確もさけあはしあびたる爰又天羽歌次と
 のふみのあり彼一人の娘ありて名を秋次とよび天性さあさま
 女はればは花方の家の侍女よかりてのちいよく求次郎とへごと
 まくさうひ今日も娘秋次とよめは酒席まつらる居るが
 あや一むべ一つの地歌次があとべまつれをひて恰も己がかげ乃
 くられさるがごとく彼方へあまらる彼方へつもとひ恨ありげは
 めさげなやうな唇もく人も怪夏よみひ歌次も何とやうんあも
 らげよやくのれが腰をさくり足葉袴の根つけは蛙の形を
 づるを取らぬ地歌の怒念かまろしきめめめあはしは蛙をえん
 らんと投むせば地歌うとしはよひはらへ草をこけてつらり
 何とやうんむらうらざる画めらふく別を告ぐうらる席にある
 人口くふ蛇の怒念さまじはれぬさう出れば求次郎うらぬいふ
 蘭菊の二女ごうりの髪の蛇とにけ雉のあづりめかして蛇と
 の類昔今おがらふい字つるがといひさし秋次といひ用夏あ
 らんよへゆをさうさべり少時は席を遠ざるべりといひあへ
 人まふむひ被歌次は蛇のつれさふといひ初の変うらむと
 へる女の一念さうんとよふとあり長物語うら夢め(と玉ふふし
 あげ腰扇うららるしこさう出たるへ近き頃旗ヶ谷のわらふ空
 田主計といふ者あり年四十といふ春の頃より風のさちとあふ

づるを取らぬ地歌の怒念かまろしきめめめあはしは蛙をえん
 らんと投むせば地歌うとしはよひはらへ草をこけてつらり
 何とやうんむらうらざる画めらふく別を告ぐうらる席にある
 人口くふ蛇の怒念さまじはれぬさう出れば求次郎うらぬいふ
 蘭菊の二女ごうりの髪の蛇とにけ雉のあづりめかして蛇と
 の類昔今おがらふい字つるがといひさし秋次といひ用夏あ
 らんよへゆをさうさべり少時は席を遠ざるべりといひあへ
 人まふむひ被歌次は蛇のつれさふといひ初の変うらむと
 へる女の一念さうんとよふとあり長物語うら夢め(と玉ふふし
 あげ腰扇うららるしこさう出たるへ近き頃旗ヶ谷のわらふ空
 田主計といふ者あり年四十といふ春の頃より風のさちとあふ



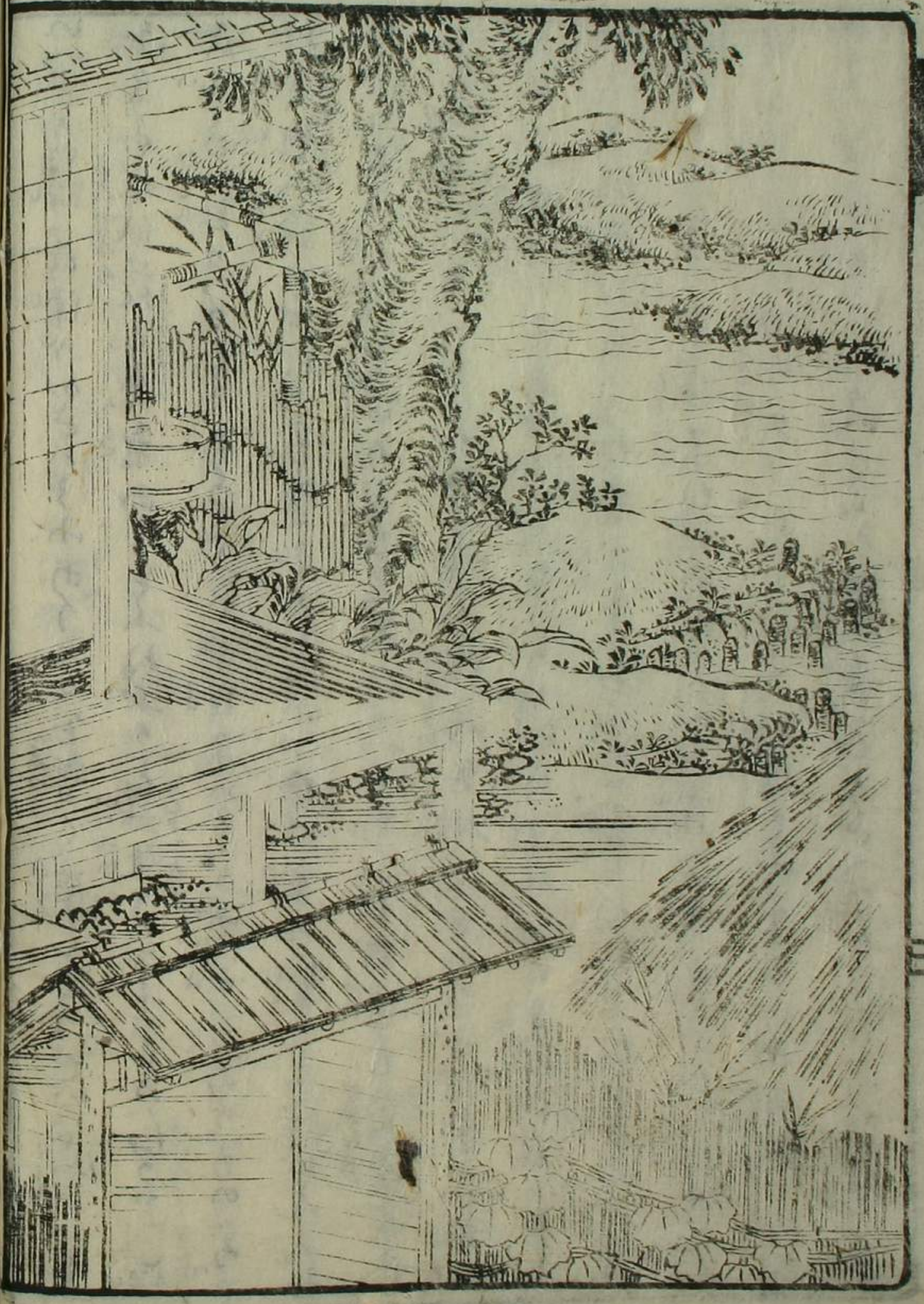
霜夜尾卷之二
 蛇の尾を巻く
 蛇の尾を巻く
 蛇の尾を巻く
 蛇の尾を巻く

くらがききくは衰へ勞れ醫師のころりともあぢはしく足へよ
 けふは主計といつる者ハ書ハ三年日あけやう。於此と名づけし
 女児只一人あり。うらるる伯世のむらひよや。容貌あやうく思
 籠の彼をも髪短く喜ハ松のた本よ似く。鼻やうく類くやうふし
 黒く虫の斑あるの雪をかびる鳥のむく。月よわゆる根のきき
 らね。これあつて娶べく者もあく。十あやうり七ハのさぬといつる
 わふちうりあねめを。日頃主計ハめうねふもひ病のうらふもひ
 夏ものいひ出く。冷めれり夏もふびりある命いせんをへるう。あ
 月十日あやうりふ。えさうくぬ風吹あ。月日のねど草の根をう
 つあふさうく黄泉の旅よあひれる。沢子ハ孤となり。俄に夢のこ
 りしむ。泣やういひつ悲ふふとぞ。殊あいにさるべし親類も散るたれ

ど俗言ふらふ人小鬼へるれとやん近鄰の人々支彼とつとひ主計ハ
 野田からりのとなどいと深切よあしてねえは頃もあはる。あつ
 里とのふ野よえ房の産はし。高西伊兵衛といふ者何といふ話
 計もく。いづらふ雨居もる處士あり。彼方へつらよれ向かつれ
 るも。道具屋三次といふ男主計あも。空のふそあれば主計あつら
 ずいへり。家をむととと子なれを屈強の夏よあめひ一日伊兵衛
 が雨居よ訪ひ中なるへ口下をく。あは口入もあく。我相識一家
 一人の女児あり。あもつとあうらむ衣も愛しくひねるふか。この
 家徒のらんやといへ。伊兵衛不斜赤び我とての地ふあるべる。あ
 らんば若武夏とのつぐあめ。幸えふあしく氷人なる人と三次よ
 このむよ。三次むあけあうけ。ひ沢子方へあうていひ出るるは武進を

わとりふえ出所は房州海上山の麓とやうなるれど久しくは洛中
 やとらぬ籠に給仕まさればまやひありある處士殊に謔算正一と
 者あり主計どの身やうりあひて女児あるじりては柱を家のおく
 らん彼人を聲よまじりて人こねて媒妁つとまへんあはれやうふの討
 らいといは三次といふ者へ已が估計のそらふ跡いと目無三次に
 異名せり愚者なれどかる夏空言いと実にくまへけ彼方
 け方かみくたさよふいひはしりる次子の遠き親類よもは夏夢へ
 婚姻とのふべくふらうりぬくてその當日ふらうりたれば伊左衛門
 殊に風と柳の糖ひをそへ既又席は臨むべし次子も今日をたれと
 醜さめくは給儀をいりどり嫁衣裳中といひさやへははの酒を
 がたの月よこへへ。老女の化粧へのりの赤襦のつととらふこと

いどののほ兵衛がわりのふあうらるを暫く誓をうつていひ雷香
 をまも水仙花と臭氣ありそふねぶると一統よさうらうらうてし
 去湯も一目らうりありあるうてや世よわうる悪女もあうりのま
 れ美醜論かぐれどもかくとあふいいで家の聲とらうれんとか
 のうらふ三次を恨りども又思ひうへてふや是も定良ぬく
 ころ羽衣のまるところあるんと梳席を同じまぐるともしし教
 月を待九月のまゑつうこふありける伊兵衛の夜の交わくもこま
 机上短檠をらうづけ書史やうごうく居があはれ一虫の声乃
 をかきさよやを障子ひらあけえれば宵は障をさとし一村時雨も
 しのちとふ馬月中天よまこの有り新橋もふさかみや白銀の縁を
 のく(いさや布やたうへとらん碓の音もとら)さなららうふかの津



深谷と老之

ふらふらこのと名ひわつらせば。往年上徳園より如式このとありき。必
 ひとめしはれ子が等のおとせし崩里人のあつて銀釵もどき出て
 めのうぬをかくさじれど。かきとをめぐりてもむへま。まよてふ
 公のやうせつさひつをまらり。あはれ我とよ人とををつらねては月
 をこころんまはと。こころ通ら格の名のまがこころんま。悔更みか
 こころも涙もあつちらふり。彼三次の牙銭は眼くれえ。いとあま
 こころひひしれど。今ハたつらも細くつらあひま。あつら障子を
 及命あつこころんま。隈の月をまろく。足(たれば)何れかあつら
 するお住吉物被備はかこせしをからるといふ消息。うつく松のつら
 いふいといや。うろを。かつらさかたさやまると火をくしてうつく
 たれば。某日二れ子とまろしあり。若まりやと彼扇とらへてこれば。

そこしそをろ。草へここのはあつら。住居まらやと胸はとつて
 とおどろ。涙子よむつつていふ。あの子はなまよりある女文字の玉章へ
 とりこれ水蒸のおとらふ。何人のうぬあつらまや。何氣をいふあつら
 して同ひたれば。涙子の糸らうて居らるが。まらと芝浦よまむ。伊豆は
 保といつて人の妻の弟よてけりね。こころは隣に網をまをまらひ
 とまじらる者はらるが。彼子業まら似もあつら。和書の種もあつら
 知るめへはれをりてあては保が別室にれ子を。ふのまらせしとく。学
 ひらるが。そのふも被か方へ来るしあ。日外これ母画りつらあ
 つひよあ使れく。赤のしことつひよ。伊豆清のまらせらるるとか。あつら
 日れまらつらけつら。人間の化をうけあつら。かゝる悪女を書とあひ
 蒜よ右つらつて。後列をまらる。何來使保よこら。これ子よあひ

足をくさひ。あつもがなと日をゆるうら。芝浦の伎保が合壁に賣家の
 うを便をひく。夢出。雲は様をゆい。おらしく。急がその家を買取
 る。旗を答をいそらく。かづつけ。芝浦へそまひを移す。ゆりてを問う
 なる竹格子ともし。あや。と牛をいれまど。かげ。花清ぶを指南を
 や。札を出し。一月二月まぐるうら。伊太浦が彼業に長さをこん及
 び。夢かまひ。門者あや。とまうられ。昔の憂さのおたれ
 いてや。ふそ。世をゆるふ。柞伊藤保といへり。の。遠く先祖を
 らぬれ。太田道港は一度民間にあらり。の。ど。その刻
 武功教度。ま。あ。び。餘光。ま。う。て。代。畠田あま。か。ら。は。こ。へ
 殿造り。あ。しく。婢僕。あ。る。召は。へ。か。こ。た。れ。御館。も。も。ら。う。ら。い
 かり。光景。く。彼。が。妻。さ。る。と。れ。見。る。れ。ば。う。ら。く。く。端。居。さ。る。夏。も。う。く。

伊太浦も合壁に傳るといふの。と。ま。く。教。々。月。の。あ。り。げ。で。ふ。も。ん。ど
 して。そ。れ。ま。さ。か。り。て。九。月。一。日。と。い。つ。る。夕。陽。の。日。蝕。し。ま。ふ。と。伎。保。が
 館。さ。る。了。髪。三。人。四。人。庭。さ。れ。ま。う。ら。う。夕。陽。を。作。さ。え。く。い。ま。の
 わ。ど。ふ。や。月。の。ま。ら。う。け。の。常。さ。れ。ど。日。の。か。り。あ。り。ま。ふ。い。つ。う。ら。う。と。あ。や
 の。い。づ。れ。あ。れ。と。そ。日。の。こ。づ。ら。ひ。ま。ふ。う。ら。と。さ。う。う。ら。れ。あ。い。ひ。ま。ふ。か
 り。於。後。も。板。先。ち。う。う。立。出。る。が。こ。ら。を。漆。の。糞。ま。う。り。の。下。衣。友
 ま。れ。と。ま。う。ら。若。さ。の。こ。つ。う。あ。わ。つ。れ。と。白。ま。ま。ま。く。と。ま。り。し。の。柳
 の。ま。り。初。の。衣。を。わ。く。と。お。ら。し。と。衣。篝。の。か。わ。り。と。れ。あ。き。実。こ。この
 世。の。人。と。も。と。り。と。び。か。ま。し。や。ふ。侍。女。ま。ら。ひ。東。國。ま。て。い。え。へ。か。こ
 う。べ。し。と。月。日。あ。り。と。書。ま。も。え。ゆ。れ。ば。ま。つ。う。ま。ら。の。蝕。ま。う。ん。く
 ら。せ。ぶ。う。く。え。ゆ。り。の。や。と。こ。つ。う。ま。あ。り。う。る。鏡。臺。の。う。ら。と。成。ら。う。

船の下より外のうへへ出とあり。伊兵衛のあしが橋上よりあつて
 海流とあつち中る波の後のうらよありくと字うしうらひのむつとど。
 この頃了巖ホガ合壁へ移りそそのふ殿の風流うらと風流せーり
 着やびくもやとよく見れば豈討んや上總國まで見たりと風流
 士は家とあつたれば。つとあひて橋上をえあげ互は両相視伊兵衛
 の兼とあひみわけして見れば。むのうけをうつけたる玉章をさること
 ませし巖の要は結ひつけ側よりおびが目よふれさるやこがかりと
 をうげとあし橋上より投下もふおろくも見れば。あつてのうらよ止り
 ね。おろ子の白さとあつち。あつちの後をうら見れば。伊保は只管目蝕
 らるが。あつちのけいひもええが。むのうけ居く侍女もよそれと
 さとられいと急ぎ玉章を袖に隠し。おびがうら面おして隣子ひれを

て入りぬ。伊去湯は女子が玉章を雨にぬきとせり。半とあつちうらとあつち
 夫よりしては汗ぬもあつちがとあつち。あつちとあつち。あつちとあつち。あつちとあつち。
 られば。伊去湯は女子が玉章を雨にぬきとせり。半とあつちうらとあつち
 夫よりしては汗ぬもあつちがとあつち。あつちとあつち。あつちとあつち。あつちとあつち。
 やあると。彼方ばかりあつち。あつちの風あつち。あつちのうらとあつち。
 かつ。夕白のま白くあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。
 すれば。伊去湯は女子が玉章を雨にぬきとせり。半とあつちうらとあつち
 夫よりしては汗ぬもあつちがとあつち。あつちとあつち。あつちとあつち。あつちとあつち。
 ら。雨居よつとあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。
 あつちと。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。
 鳴。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。
 を。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。あつちのあつち。



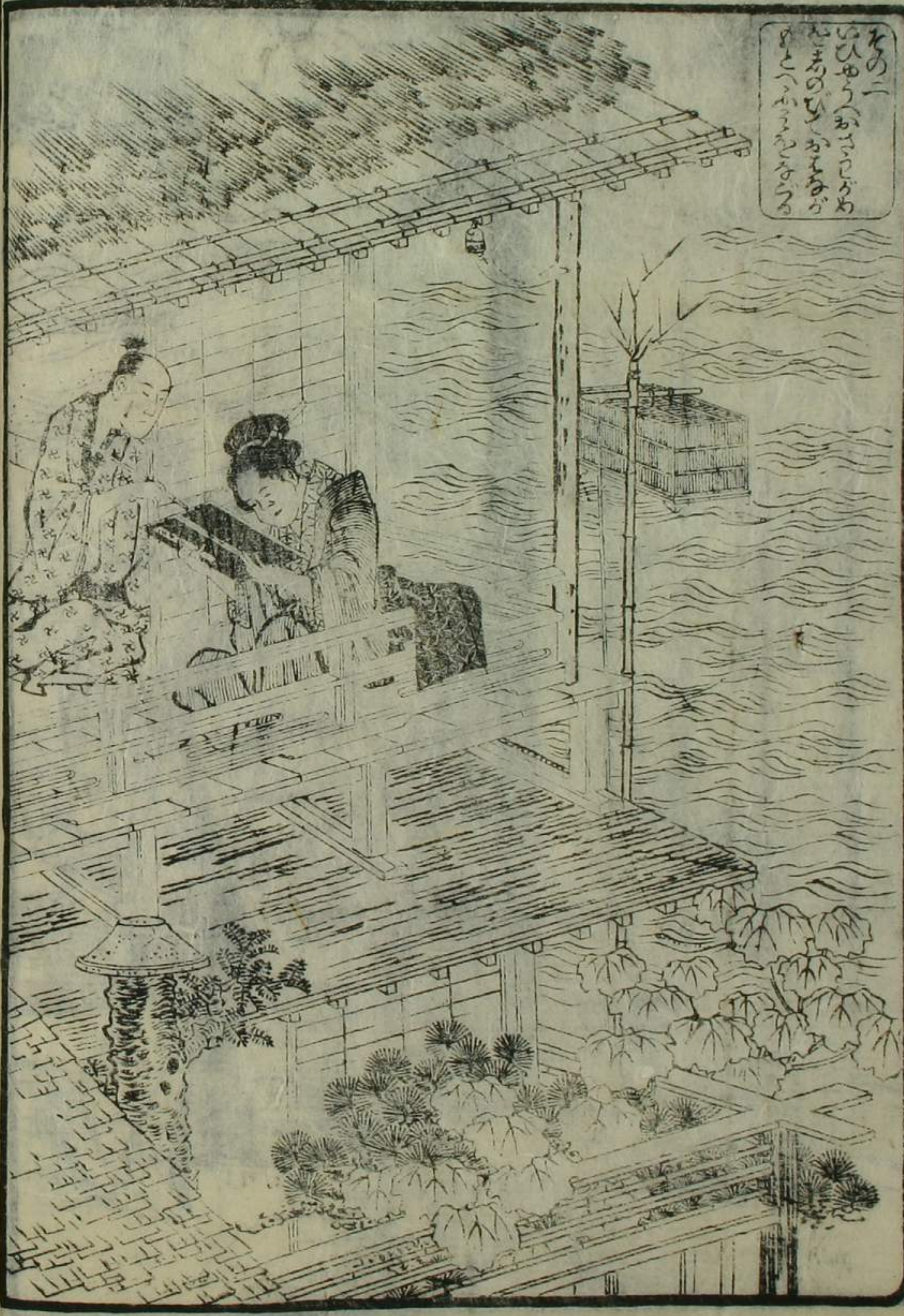
山崎闇斎先生



おんなのこころは
いかにあつちう
もくもくといふ
かたうつら

山崎闇斎先生

その二
いひやうかたごめ
おののじかき
おののじかき



第二回

六浦已たり
よがひの猫

休題且話伏保が側女於花はつらつとありて伊豆の家こころ
いとよ。往年い立木林觀音岡帳の茶亭まゝ娘は伊六浦
急想に彼人なるて下級らちとくへくもあひさししがその夜不
意雲舞半六といふ先棍ふとつれ姉の和山まゝ殺害され
あつちらぬらぬ令をまじてととらう。それらう半六は於花を誘
て武孫國よのり。名ある柳若く賣はさんとなりて死に
へつと泣つて一切めのもさうべど。浅き一とに娘とあり一度客よ
そつらうもをらつらうよのいへ。古成うても死ねべと口をいへ容
然い秀乃と悪棍の匂引せしを知る。名ある娼家よくへ誰あつと

旅花をうへんとしよ者もさ。半六もいふるめてあはし強ていふあ
 ら意をくらぶれりやせん。共一つ。騒一つ。さよよふいひうら波行
 志、神浦神奈川とのうらうらなる旅店。やうや空をうら乃金
 こらうりし。半六のゆゑなれどさうり。旅花の騒れぬは
 ぐ。そのはなは海もゆゑ。泣ありし居るけり。あうら、保保江のあま
 鎌倉の秋景をさめ。六浦こらうせし旅行の安路。は旅店。宿
 ありせ。紙門のあうら。めく女子の悲しむ声をゆつ。下奴さひ
 縁故をさひ。いと不便なるもふありひ。もづ被女子をらびて親族も
 あうへ。そのふかさをそへ身のかささうらむ。さうらやべーと。旅花をさひ
 河等由縁。よく此旅店へらうり。これ。我らうらふおよん。わと
 うら。家小誘引。うらうらどねむらう。夢(見れば。旅花の涙をさへ。半六

とうらと。いふ。後ささ。憂身のうら(旅)あらもさうらうら。保
 い下保ものや。し。とふ鄙。まひ。し。と。い。え。え。と。交。能。を。さ
 をゆ。か。と。ありひ。家長ふあり。於。は。身。の。代。と。盡。は。浦。の
 旅。の。れ。う。う。ら。れ。ば。三。子。の。保。が。大。恩。を。う。ら。え。い。な。む。と
 善。う。く。側。室。と。う。ら。う。う。さ。の。い。笠。森。う。く。え。ん。と。さ。る。風。流。士
 の。と。は。う。の。る。も。忘。れ。や。う。ど。ふ。と。び。合。壁。の。掃。は。ま。さ。お。を。め。め
 う。を。知。り。既。は。外。情。を。ら。う。此。ら。う。伊。去。清。が。知。り。そ。へ。る。旅。考
 を。探。う。へ。い。ふ。も。し。さ。返。夏。を。さ。る。へ。と。哀。の。う。け。を。し。お。さ。さ
 さん。も。ら。う。ぬ。の。中。の。も。人。の。あ。れ。を。か。の。う。ら。ふ。悲。し。え。又。い。び
 災。の。境。ふ。あ。ら。い。し。と。保。が。さ。さ。け。う。く。玉。緒。を。つ。る。旅。と。あ。し。と。旅
 かりひ。さ。は。う。ら。う。の。意。塚。津。の。國。の。と。と。り。塚。の。あ。る。と。も

才よとて。一人抱をせしめり。さても伊去清の病の床よあ
 づき。於花がものもあひひらひあり。強枕をせられざる
 病よもあつされ。ある夜一人孤燈よひらして書をしり。ね
 世の友を机上よひらひ。かきとて。一層なる。於花はつらふ
 あつて。某とあつめ。かをきて。み抱はし。伊去清よひらつて。ひ
 けの君よ。夜よ。まて。ね。う。つ。た。ま。ね。が。心。の。さ。ら。う。ら。ま。な。り
 けり。明日のて。か。も。ま。う。の。ま。へ。と。む。を。め。ら。ひ。く。の。か。面。と。伊。去。清
 へ。か。る。も。ひ。ら。う。ら。う。く。我。書。を。ひ。く。と。さ。ま。あ。つ。ら。う。の。女。の。い。ひ。こ
 ち。れ。よ。ま。つ。て。る。べ。し。これよ。か。つ。ら。ふ。よ。な。ど。巴。い。と。く。は。な。し。よ
 と。言。あ。ら。う。罵。れ。が。於。花。へ。え。さん。言。事。も。な。り。や。さ。せ。ま。へ。と。お。位
 へ。伊。去。清。が。擔。り。よ。う。ら。う。と。か。伊。去。清。於。花。を。も。と。つ。た。の。か。面。杖

つれて。れよ。な。れ。又。冊。子。を。ひ。き。り。更。は。沢。子。み。と。う。あ。れ。ね。は。か。杖
 も。せん。ま。へ。な。く。候。を。神。よ。お。し。位。く。取。戸。ふ。り。う。ら。う。伊。去。清。も。枕
 を。と。つ。て。眠。つ。ん。と。は。し。不。斗。側。を。見。れ。が。ひ。の。小。猫。支。車。の。綴。り。ま。じ
 れ。あ。を。ひ。居。る。が。さ。ね。ま。ぐ。紅。の。袴。玉。を。括。ひ。を。し。よ。いつ。の。ま。ふ。や。ん。ま。ま
 白。る。練。と。へ。い。ら。う。伊。去。清。の。う。ら。う。つ。つ。わ。ど。ね。る。よ。糸。を。あ。て。ら。け
 くら。ふ。の。あ。ら。う。練。の。う。ら。ふ。ま。ま。あ。ら。う。玉。章。あ。り。胸。を。う。ら。う。後。て
 ち。ひ。う。け。が
 彼。こ。も。あ。末。の。ね。の。あ。つ。い。も。あ。つ。その。海。よ
 日。が。家。の。業。も。う。つ。せ。が。ひ。む。じ。の。文。の。か
 又。の。あ。ら。う。心。と。ま。え。ん
 と。ま。る。し。あ。つ。て。於。花。が。み。跡。ゆ。ま。あ。ら。う。も。な。れ。が。て。前。日。の。返。し。と

なるべしとむよめふい恨らゆる末のねと女のあはしむあはれむし
 へ清浦抄ふえんそく。又古今集よも君をわめてあはれしむとあ
 へこれば後もこれとひそしめあひよめて。日か庵のうのせ見れば保が
 家よあはれらるゝ秋まじし昔を三つよとらとせ一日とらる。彼唐土
 の名妓が隠語をあらひ又よむをそとらと忍べもとらる。藤原原義を
 ぶべしと。病も預よ愈ゆるららしむ。その夜は枕をそれとわがりも
 やらむせ一日をこそとららぬ。わざとくその日ふもあがりたれば病床
 をあはれ湯とひら髪をけづりは子よむうつてりひたるはそれの籠が
 答の何某かめとへ逃れざる夏ありておんとおひ湯をひたさるが
 なふとやうん又ららあ。他身此書簡をのりて彼所よあめむき
 如此のこのとりのひのむべし。路のわざもらとせをたれ。今言ひは某ののり

一宿一明日久るべしとこそよく又賺さるれば於此の世もむつどいと
 せしむて出ぬり。伊去清の只日のくふくを待てふれど天公うり獨
 ちのつらぬにあらじと。秋の日あうらうかそしとあめひ日びと。漸く
 初更もまぬれれば庭さねよありとら。まは築地ようりては保が鼓
 せうふよ。あつてそのめあけとあはしく。築地よ梯子をうけおれとら。
 公中よ。忍びこへ伊菰の前裁をうらえれば秋萩落つらくの秋
 葉ももたらふ。あはれとせ。星のひうらふちのええと。月の夜
 くらもるゆえとらあやし。家居つとぐく。南面よ障子よとせま
 一燈火いとあうらたれば。かそく。風入りのぞとせえらふ。調度とこ
 のあわらうとせ。今浮らうとええと。柱をあらべし。あ。琴をうらう
 よりや。香炉よ火あうりて白ひとのちうふらう。髪をうらう。髪
 の髪子うらう。あ。

うつりし子なる女。白く玉をのべらるるを膝のうへにさしお
 めひるる。さしは何となくむきどげ又見えたり。遙かこのさう十
 二三なる女童より来り何やらんひそくおがらふ人ありた
 ろとで。彼女外のさそむれける面を見れば。さうぶらうもあはれ
 子なり。胸へ裏の袴袋ふきまぐし。女童があがりぞれのづるをもち。不
 とくと障子をそむらそと。かともへ。杖のたも若や彼人ありやと。
 障子がひられ伊去清と云ふより。若くあひひけし。さうぶら
 少時の顔を紅まじし扇をとつて。燈火をあつげけり。此処へいと
 ちかちか人のさうさあはる。いけ方来り。右のさうは。銀をさうさ
 盤のわつれを掲あげた。伊去清が身を携へ。袋開うへでさう。わづら
 ちひる。隙をふ二人の言葉もあう。伊去清目飽して。これ子と見れ



伊去清の
 目飽して
 此の子と
 見れり

うる彼半六の當地は足をそめ頼列組といふ町奴の同子なる性
 名をばあらしめたるは風説は少ゆるやうのまが父兵衛の秘藏
 なる南無阿彌陀佛の文字を七どころに彫る佩刀を盗とり
 半六が差料とるせばこそうなる證據は何卒彼を擄り出し
 妻よ力をそへ婿の仇人を討せては君をまゝひやうせしも一ツの
 此一夏をこのまのうせんとあられ強うさるる心よもあはれとて
 まぐとおごりたる是正道より正道はあうぞとて婿の仇人を
 討んとあられとて側室の身とし主の目を掠め異人はね情
 を通して天刑二人が身よ及びざらんや遂に敵を討ひつゝのそ
 伊去路は子に後よ落命なるをえり世の人のあへばさるもなし
 人ともや疎敵曉をうのうられれば伊去路はそれをもとんとさる

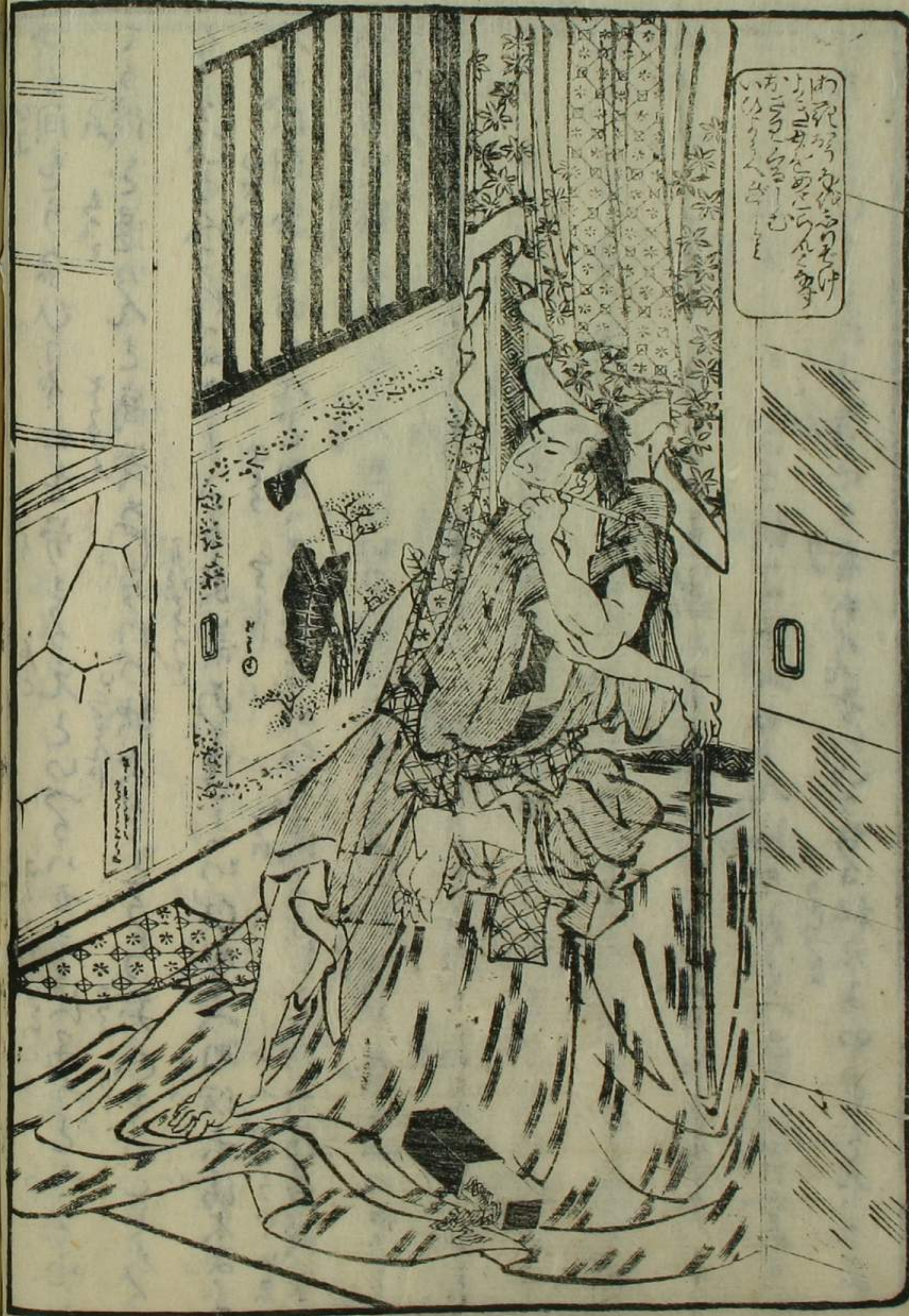
を以て子少時と仰とち空貝よりあせせしうせとて今春家長
 依保が身よあうざればくむまづうおごりたりゆれと又の逢流
 も定まるぬよとかららる。嗚呼いづる縁はしゆや雙の玉をたね
 の男の秘よりうしめ小夜衣よりたて夫をぞかたむら夫よりへお
 よふれくまのひあふよ。日を後月をかたねあとにが浦よひく綱乃
 依保が身よより。あまの者のあま怒りあま。子に伊去路はう
 うそとべうしが。前よもいふごとく情あうらなれらるるはれこ
 る心のいでぬ一女のいひうりともせんは只何となくた子をば伊去路
 が許すらんと思ひ一夕は子を兩つの一室よまねた。さよくと同
 ぐれどは子にうめのと身よあびるはしをいひとたれば依保が
 ねて於にが整簡をひらひあれを證據とし詳し白状するさあしき

かりふはくちうらひとひりるふは子ハ澄もわりとれ名ひるれど。のぐさ
 づれもつもあき一五一十を白地と詫りければ保赤かごろは西舟の
 伊去請を上徳國よりく見しとあれが是れよりこれの情人ハ
 西舟が罪を喰んふひは恥もきよあつるべし。かろくむじもかた旁
 ころころとこれと。その破つた子を外しり。こやせとほじかくやせはじとこ
 ちしひしが急度心を定め彼侍女飲次が又飲次。ころ頃保赤。餓乃
 喰客ありれば彼を伊去請が家よりつれ。只何とあき花子をこぼさ
 べしと。そのころむとびをなしりるふ。二人の玉樹もどうぶし。かおしとく
 ころこべとも。爰又難免あるハ元来伊去請ハ室田の家と接脚督の
 となれ。ころふしと。於沢を退んとありひころらふありふし。合壁より
 飲次やふとれ。伊去請が面持ありて。伊去請が席にあり。

ころ間をうらむ。こが心を労まらえといつらひ女房は子かとく。ころふし
 てう彼を退んと高峯まじられ。飲次がとらり笑ひしれととあり
 ころふしぬくれよこころ良計ありとこといひ。か（ね伊去請はよよ
 ろとび引出りのまんど溜り飲次よからり。夫よりしと伊去請益夜家
 みありむ。賭し利を失ししありむ。ぬふりて。於沢が衣のいりころこ
 柳并よ。ころころ。悉く賣代りし。柳巷よ。かひて家よ。かへらび。さ
 ころ主をぬがとく。壁中ぶれ。疊ちぬれ。連雨よ。あゝ。ころて柱を
 ころひ。ころい。むせ。れ。伊去請の正しく。ころり。居く。ころ。伊
 去請家よ。められ。夫となし。諫の言葉をめら。あれど。伊去請うつそ
 ころれど。我家よ。あつら。夜よ。何人申ん。汝がめら。あ。の。び。男。の。ま。り
 ころを。ころ。しく。日れよ。き。ころ。者。あり。その。ころ。ある。私。夫。よ。や。ころ。や。り。み



香夜屋



わが心は
おのれに
あはれ
いふ人
ま

香夜屋

白杖をせとねるしをいひつけ。果て方のいひねがらば、次子をもつて
 かへ黒髪をそよまかる。赤裸となしくお擲せむふといひ説
 言柔もろく、次子に下位あるのそへ、伊去清次子を外面めはさ
 んし。戸をさかめておちく音もなすむ。きつやううへつて外なる。
 へんぬく顔は似れぬ。小心をうやめられ。今の身ひとつ小憂
 難美のかさなりしうらしく。とまへぬ親類もろくつるせんとも
 とひが所待今のきこるうへつる。昔の海に浪間よけらひ。ふ
 楽し。小世を預げると。あつらひの小川へ舟を没て、死果するぞあ
 る。伊去清の良計そのひとろと怪びられども、何とせんうらむ
 くて。當所のさまひもなし。相刈熊倉札橋のころころ。板戸の
 森とや。一ころり。雨居をうへ。ころころ。柳巷一うらひうらひ。

一利を失ひ。いな。次を退人計策られ。實の赤貧もあ。ひ
 散れぐしく。舎屋をきつうひ。も。め口入する。飲次をうめ。保が
 方。つら。既。既。子。を。娶。げ。れ。ま。り。め。その當日をぞ。結。う。ら。ら。

○ 於此伊去清が國中の私話。い。い。つ。て。い。求。次。郎。う。ら。む。か。ひ
 づれど。あ。な。じ。こ。を。さ。び。識。はん。め。の。ら。ら。と。く。と。れ。し
 更の詳なるを。求次郎が物。ご。う。を。し。て。ん。人。の。し。め。ら。

霜夜星二巻 畢

霜夜星二

新編 玉井冊子

後編 玉井冊子 全部
一竹記 六冊

加津しうれ 妙影画に繪夜が
忍とくす乃言の系張と(善を

しんじん 忍をこいひの例の
けろく 物語

来已 春秋 板當 十月 奉りて びと ちゆ

